入賞22校が決定、力作そろう

第37回「ベルマーク便りコンクール」

2022年度の入賞22校は以下の通りです。（順不同）

【優秀賞】
葉山町立葉山小学校（神奈川県）
摂津市立別府小学校（大阪府）
大津市立下阪本小学校（滋賀県）
大田区立調布大塚小学校（東京都）
横浜市立駒岡小学校（神奈川県）
逗子市立沼間小学校（神奈川県）
奄美市立朝日小学校（鹿児島県）
印西市立滝野小学校（千葉県）
札幌市立山の手南小学校（北海道）
岸野保育園（長野県）
神戸市立稗田小学校（兵庫県）

【佳作】
鎌倉市立小坂小学校（神奈川県）
練馬区立立野小学校（東京都）
京都市立桃山東小学校（京都府）
大田区立山王小学校（東京都）
近江八幡市立金田幼稚園（滋賀県）
大阪市立常盤小学校（大阪府）
沖縄市立高原小学校（沖縄県）

【特別賞】
真岡市立真岡西小学校（栃木県）
一宮市立今伊勢西小学校（愛知県）
尾道市重井公民館（広島県）
茅ヶ崎市立梅田小学校（神奈川県）

◇

コンクールは来年度も開催します。対象は、2022年10月1日～2023年9月30日までに発行した作品で、締め切りは2023年9月30日、消印有効です。優秀賞を受賞した参加団体には3万円と表彰状、佳作と特別賞は1万円と表彰状、受賞を逃しても参加賞として2000円の図書カードを贈ります。

㊤佳作を受賞した小坂小のベルマークだより
㊦優秀賞を受賞した朝日小の「朝日ベルベル新聞」

光と紫外線のパワーを感じ取ろう

鹿児島・曽於市立中谷小で理科実験教室

①忍者えのぐを練りこんだサンバイザーやマントを身に付けた子どもたち　②息を吹き込むと、まるで風船のよう　③バッジもスライムも上手く出来たよ　④手作りの太陽の模型を使いながら、太陽のしくみを説明する村上規代先生

鹿児島県の曽於市立中谷小学校（柳野竜生校長、児童15人）で10月8日、理科実験教室が開かれました。ベルマーク財団は、へき地校に通う子どもたちへのソフト援助として、1999年から理科実験教室を開催しています。今回は「光のエネルギー」と「紫外線」をテーマにした2つの実験をしました。

講師は村上規代先生。高校で理科の教師を務め、退職した21年前から、科学の楽しさを知ってもらおうと、わくわくサイエンス教室を立ち上げました。これまでにのべ300回以上、理科実験の講師としてボランティア活動をしています。

まずは太陽の話から。太陽は水素原子が集まってできていて、水素ガス同士がぶつかり、ヘリウムになるときに、光と熱が出ます。村上先生は「太陽の恵みをいっぱい受けています」と説明しました。

「紫外線に当たるとどうなる？」という先生の問いかけに、「焼ける」「黒くなる」と答えた子どもたち。正解です。紫外線が皮膚を通し、細胞を変化させるからです。

ひとつめの実験は、太陽光を貯めると光る「ウルトラマンバッジ」作り。2種類のレジン液と、蓄光材の粉をビーカーに入れて混ぜます。レジン液が熱をおび、粘り気が出て「化学反応」が起きました。ウルトラマンの型枠に流し込み、白く固まったら、型枠から取り出し、赤いパンツの模様と銀色の目のシールで飾り付けて出来上がりです。

バッジを太陽光に10分ほどあてると、光が貯まります。バッジ作りからの学びは「集めた光は、後で使える」ということ。

ふたつめの実験は、「忍者えのぐ」を使った、目に見えない紫外線をつかまえる「忍者バルーンスライム」作り。忍者えのぐは、紫外線を浴びると色が変わるインクです。スライムの材料は、このインクと液体のり、お湯、固める役割を持つホウ砂液。混ぜると、プルプルとしたスライムになりました。太陽光に当てると、室内では白かったスライムが、ピンクや赤紫、黄色にそれぞれ変わりました。

村上先生は、地球を守るオゾン層がフロンガスによって壊されていること、ごみの分別が大切なこと、帽子を被ると紫外線から身を守れることも伝えました。

児童を代表して、橘木翔さん（6年）が「理科の楽しさをもっと知ることが出来ました」と感想を話しました。

「未来の創り手」のために

第71回全国へき地教育研究大会、山形で開催

山間部や離島など都会から離れた地域の教育の在り方を研究し、次の授業や学校生活にいかそうと活動する「全国へき地教育研究連盟（全へき連）」主催の全国大会が9月29、30の両日、山形県内の10会場で開かれました。同連盟がすすめる「第9次長期5カ年研究推進計画（9次長計）」の4年目にあたり、3年間の研究を踏まえ、計画を評価・発展させていく重要な年と位置づけられています。71回となる今大会は昨年に続きオンラインも使った「ハイブリッド型」で実施され、多くの教職員らが参加しました。

山形大会の研究主題は「ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる子どもの育成」。山形県内の公立小中学校は合計324校で、このうち、山間部地域と小規模校が占める割合は合計14.8%。近年になって人口減少と過疎化が進む地域が増え、県全体で統廃合が進み、あらたに複式学級が設置された学校が出てきているそうです。

初日午前中の全体会で、高木光紀・大会実行委員長は、「子どもの輝く未来のために、実りある大会にしたい」と挨拶。全へき連の柿崎秀顕会長は、「特色をいかした教育実践を全国に発信し、あらたな時代を築く礎としたい」と宣言しました。

記念講演として、クラゲドリーム館（加茂水族館）の奥泉和也館長がクラゲの知られざる生態と展示のむつかしさなどを語り、会場は大いに盛り上がりました。

午後は課題別に6つの分散会が開催され、全国・地域ブロックごとに12校が発表しました。

沖縄県の石垣市立吉原小学校の発表では、神里美沙緒教諭が登壇。児童数11人、保護者は全員が県外出身者だそうです。

少人数や複式学級指導でガイド学習などを採り入れ、スノーケル体験や浄水場の見学、キビ刈り体験、三線演奏など、地域資源をいかして行ってきた、体験的な教育活動について報告されました。

2日目の分科会では、県内8つの小中学校がそれぞれの公開授業のなかで、研究の成果と課題を発表しました。

「ともに学び合い、深め合う授業の創造」を主題とした研究をしているのは、大蔵村立大蔵中学校。教師は、一方的な講義形式の指導にならないよう、「生徒と生徒、生徒と教材をつなぐ存在」となることを目指しています。